

らじっく

自分らしく、粋なくらし

まちづくり・生涯学習情報誌

2010.8 Vol.27 | 夏燈号

なつともし／暑い一日が終わり、涼しげにともる夏の灯。広島市では毎年、平和の願いを込めた「灯籠流し」が行われます。“平和を想う”一ゆつたりと流れる灯籠を見ながら。そんな想いで過ごす夏が、広島にはあります。

- 特集「広がる活動の輪」…………… p1
- らじっくキャンパス／らじっくコラム …… p4
- プラザ通信 …………… p5
- らじっく情報の森 …………… p9
- ひろしま八区イベントガイド …………… p11



「広がる活動の輪」

つながることによって広がるチカラ。広島と、人をつなぐ橋渡し●ひろしまシン大学
支える人の輪で子どもたちに夢と希望を！●NPOスポーツオフィス・ウン
場をつくることで、着物の愛用者が増加。
和の文化を見直し、広島の新しい魅力に●ひろしまきもの遊び
らじっくキャンパス●DIS広島
『SB、CBの経営の元は？』●NPO法人コーチス 児玉宏





「広がる活動の輪」

ボランティアや市民活動には、その思いに共感して、気持ちがつながり、人がつながっていくものがあります。仲間や参加者が増え、周囲の協力の輪が広がって、成長していく活動の様子をお伝えします。

▼開校式の参加者が「街をまるごと、キャンパスに」のマークを持って記念撮影。希望に満ちた表情が印象的だった

つながることで広がるチカラ。 “広島”と、人とをつなぐ橋渡し

【ひろしまジン大学】

<http://hirojin.univnet.jp/> メール:info@hirojin.univnet.jp



校舎を持たない 自由な学校

5月15日に開校したばかりの「ひろしまジン大学」。名前に大学とつきますが正規の大学ではなく、誰でも気軽に参加できる生涯学習の場です。アリスガーデンで行われた開校式には、多くの参加者に加え、たくさんの報道陣が取材に来ていました。キャッチフレーズ「街をまるごと、キャンパスに」で表現されるように、特定の施設を持たず、室内・野外を問わず、街中全てをキャンパスにして授業を行おうというもの。当面は毎月第3土曜日を講義の日にしています。登録すれば、誰でも無料で授業を受けることができ、現在、10代から70代まで約400人が登録しています。

個性的な授業の数々

授業は、硬軟織り交ぜたユニークなものばかり。これまでは、本通りを歩きながらの歴史探訪や、NPT（核拡散防止条約）につ

いての講座、広島のプロレス「ダブプロレス」による肉体トレーニングや、雑誌編集の業務体験などを開講しました。今後は、言語学の教授による広島弁講座や、外国人が本音で語る広島観などの予定があり、企業とのコラボレーション授業も計画しています。次々に個性的な授業が実現できるのは、ひろしまジン大学が培った広いネットワークがあるからこそ。周囲の力を借りながら、つながりができた企業や市民団体などは百数十にも及びます。また、授業ごとに授業企画コーディネーターという担当者がつき、テーマから場所選び、内容構成に至るまで気を配り、楽しく学べるよう工夫を凝らしています。

人をつなげる役目

代表の平尾順平さんは、かつて東京を基点に途上国支援の仕事に従事し、世界各国を飛び回っていました。外から見ると、初



▲「Helloひろしま」みんなで話そう！広島のことへの授業の様子。年齢性別国籍が違う生徒が集まり、それぞれが広島への思いを語った



▲アリスガーデンで行われた、ひろしまジン大学の開校式。学長の平尾さんの挨拶に会場から大きな拍手と声援が起った

支える人の輪で 子どもたちに夢と希望を！

【NPOスポーツ オフィス・ワン】

<http://www.npo-officeone.jp/> メール:officeone@hbs.ne.jp

▼広島県総合グラウンドで行われたサッカー交流会では、専門家の丁寧な指導も受けられる。オフシーズンには、プロの選手が顔を出してくれることも



スポーツを柱に 子どもと交流

NPOスポーツ オフィス・ワンは、障がい者施設や養護施設の子どもたちを対象にした、スポーツイベントの運営や、サッカー教室、スポーツ交流会などを開催しています。スタッフには、審判員やコーチの資格を持つ専門家や、元プロ選手など高度なスキルを持つ人がたくさんいて、本格的な指導から楽しみ重視の交流まで、柔軟に対応しています。

昨年は定期的に開催している知的障がい者のスポーツ教室の中から、公式リーグに登録するチームも立ち上げました。県内数カ所の養護施設へは毎月訪問し、スポーツ以外の交流も深めています。

子どもたちへの恩返し

活動がスタートしたのは、2003年。心臓のバイパス手術を受けた代表の岩崎全記さんの強い思いによるものでした。プロのサッカーコーチだった岩崎さんは、

手術により身体の不自由を失った上、医師からは余命を告げられ、自暴自棄になったこともありましたが。そんなときに、心を救ってくれたのは病院で出会った障がいを持つ子どもたちでした。

残された命で、何かできることはないか。「自分の財産は、サッカーと仲間しかない。それで社会に貢献しよう」。これが原点でした。専門的な指導を受けるにはスポーツクラブへ行かないといけません、それがむずかしい子ども

人から人へ。

善意の輪

最初は「活動を続けていれば、寄付も集まるだろう」と、資金について気軽に考えていましたが、そんなに簡単なものではなく、結局お金は集まりませんでした。しかし地道に「気持ち」と「人のつながり」を大切にしてきたことで、協力してくれる人が増え、ボランティアに支えられて今まで活動を続けられました。

知り合いから知り合いへと広がった支援の輪は、プロや元プロサッカー選手たちに広がり、アドバイザーという形で支援してくれ

▲施設の相互交流として開催するサッカーの交流試合。日ごろの練習の成果が出せるようにと応援にも熱が入る



めて気づいた広島の魅力。地元に戻ることを決意し、まちづくりを考え始めました。広島の良いところを知ること、伝えること、もつとおもしろいことにすること。そのためにはどうしたらいいのか。帰広して約3年、試行錯誤を続けながら、たどり着いた自分なりの答えが、ひろしまジン大学でした。

広島を盛り上げ、経済や文化を含めて、まちを活性化させることが大きな目標です。そのため、ひろしまジン大学の役割はつなげる。こと。「授業をきっかけに新しいコミュニティが生まれたり、学生仲間が集まってサークルが立ち上がり、研究会が発足したり。ひろしまジン大学を媒介にして、人と広島がつながり、人と人がつながり、人と企業がつながっていく。そういう橋渡しの役目を担っていきたくですね。バラバラだったものがつながると、強いパワーが生まれるはずですよ」と、意気込みを語られました。



▲児童養護施設には定期的に訪問する。顔なじみのスタッフたちと一緒に遊び、子どもたちも満面の笑顔

る選手も多くいます。サッカー用品や試合チケットをプレゼントしてくれたり、オフシーズンになると定期的に広島まで足を運んで交流イベントに参加してくれたりする選手もいて、子どもたちはとても心待ちにしています。「うれしそうに輝く瞳を見るたびに、力になりたいと思います。ゆつくりでいいので理解者が増えて、コッコツと末永く続くといいと思っています。いつかは活動が全国に広がっていけばいいですね」。

交流活動をしている養護施設の子どもが2人、今年の春、サッカーの待生として高校に入学しました。活動が子どもたちの夢やチャンスを広げるために役に立ってたのかもしれないと思える、うれしい出来事でした。

らしくキャンパス

今回のらしくキャンパスでは、地域に根ざした青少年の居場所づくりに取り組んでおられるDIS広島へ取材に行かせていただき、代表の山本さんにお話を伺ってきました。

「DIS」というグループをご存知でしょうか。

「DIS」とは、「Dream Intelligent Service」の略語であり、広島市の己斐地域で非行少年の更生や地域の子どもの育成活動に取り組んでいるボランティア団体です。

今回、代表の山本誠さんから活動への思いを聞かせていただきました。

きっかけは30年前、地域住民の交流を目的に有志で開催した球技大会に、地元の養護施設の子どもたちを交えたことでした。

最初こそ己斐地域だけの小さな活動でしたが、その後のフラワーフェスティバルへの参加や、地域の清掃活動、また毎年行われる球技大会など活動内容が充実し、その魅力から今では広島市全体から多くの参加者が集まる団体となっています。

主な活動資金は、フラワーフェスティバルなどで子どもたちと屋台を出して得た収益でまかない、余ったお金は市の障がい者福祉施設に寄付しておられるそうです。また、10年ほど前からはこういった活動に暴走族などの非行少年の参加も受け入れ、更生活動にも力を入れるようになったそうです。さらに、かつての非行によって就業が難しい若者たちの働く場をも支援しているということで、その活動内容の幅広さにとても驚かされました。

第6回 りしくコラム

こちらのコーナーでは、広島市で活動されている団体・事務局の方に市民活動やボランティアに対する思いをお聞きしています。今年度は、社会的課題を解決するビジネスとして、また、地域における安定的な雇用創出の受け皿として期待される「ソーシャルビジネス(SB)」・「コミュニティビジネス(CB)」についてお聞きしています。

SB、CBの経営の元は？

2000年にNPOを立ち上げて、今年で、ちょうど10年になります。私は、NPOを立ち上げた時から一貫して、新しい職種を創り出すことで、自分やスタッフたちの生活を支えることを目指しています。

たまたま、私の周りには運動(スポーツなど)の指導者が多く、まず、その能力を必要としている現場を見つけることから始め、現場が求めている目的を探りました。そして、その目的を達成するためのプログラムを指導者たちと考え商品化。新たなビジネスツールとしての活用を社会へアピールしていきました。

その時期、広島県が抱える



▲活動の様子

DIS広島 代表 山本 誠さん



「働くことで汗を流し、彼らに社会的な『居場所』を与え、アイデンティティを確立させる。こうしたことで、誰にも『生きる喜び』を知って欲しい。」というのが山本さんの活動理念だそうです。

「どんな人であろうとも地球上の全ての人々が生きる喜びを実感できるような、そんな教育をやりたい。」とおっしゃる山本さんの熱い言葉に、愛情を感じずにはいられませんでした。非行少年の更生活動や、地域の子どもの育成活動。その中で我々自身もたくさん学んでいる、と山本さんは繰り返します。

私たちが社会の中で生きていくには、さまざまなルールを守らなければなりません。しかし、それだけでなく、愛のある地域づくりが、子どもたちの豊かな心を育み、ひいてはこの社会の秩序を守ることになるのだと、この取材を通して深く学ぶことができました。

取材させていただいた山本さん、本当にありがとうございました。

レポーター 広島市立大学マスコミ研究会 児玉 健一、上田 優輝、畑中 朝子、村上 貴司



▲球技大会表彰



着物を日常に取り入れる
着物といえば、ちやうと特別な日の装いというイメージを持つ人も多いのではないだろうか。ひろしまきもの遊びは、日常の中で着物を楽しむ機会づくりと、日本の文化に触れる活動をしています。きっかけは2005年、当時は

日本文化にあまり興味がなかったという代表の沢井律子さんが、海外移住を夢見て、海外で日本文化を紹介するため、に着付けを習ったことでした。着物に触れるうちに、季節感をたっぷり取り込む和装の奥深さや和の世界観に惹かれるとともに、今の日本人

は教室で習わないと着物を着られないということに改めて気付く、さびしさを感じました。そこから始まった、ひろしまきもの遊びは、着物を気負うことなく日常的に楽しみながら、豊かな日本の文化を見直して日々の生活に取り入れたいという思いが柱になっています。

和で遊び、和を学ぶ

代表的な活動のひとつが「きものでそぞろ歩き」です。本通りや宮島などを着物姿の参加者たちがそぞろ歩いて、着物の美しさ、楽しさをアピールします。道行く人が振り返り、ときには海外からの観光客から写真を頼まれることもあるそうです。見かけた



着物姿の人が行き交うまちづくり

気になるイベントやセミナーがあれば、ホームページからの申し込みで、誰でも気軽に参加できます。多い時には60人程度が参加していただきました。

日本文化の学びにも力を入れています。単発で行う勉強会「温故知新セミナー」や、終日みっちり授業する「日和ごろ大学」などを開催し、これまでに、落語に触れたり、着物のお手入れ方法を勉強したり、日本茶の楽しみ方や風呂敷の使い方の講義を行うなど、さまざまな切り口で勉強の場を提供してきました。

人が一人でも着物に興味を持ってくれたら、と考えています。そのほか、路面電車を借り切つてのお出かけやビアガーデン、クリスマスパーティーなど、イベントは日本の行事とは限りません。



▶レストランでの納涼パーティー。この日は、薄物や浴衣に身を包んだ約20人が集まった

加するイベント企画へと発展しました。「広島で着物を楽しむ人がもっと増えればいいと思います。広島は国際都市でもあり、多くの外国人が訪れますが、着物文化が広がれば観光客もさらに増えるのではないだろうか。目標は、広島を着物姿の人と触れ合える機会が多いまちにすること。今後は、海外の人との文化交流も考案していきたいです」。広い視野に立った活動が、今後とも期待されます。

着物で出かけやすいまちづくりを目指す、ひろしまきもの遊びを応援して、着物で行くとサービスを提供してくれる協力店も増えています。着物人口が増えて、新しい文化と伝統的な文化がうまく混ざっていけば、まちの文化にも奥行きが出て、広島の魅力ももっと増していくと考えています。



◀「きものでそぞろ歩き」で、宮島へ。島内では、多くの観光客からカメラを向けられた

大きな課題であった暴走族問題への解決策として、これまでのプログラムを改良・応用することを提案し、事業を実施しました。

それが元暴走族少年の体操指導による高齢者福祉事業です。本来、ビジネスの発祥の元は、「困った人に代わって、報酬と引き換えにその問題を解決すること」だと私は思っています。その報酬に見合っただけの価値(専門性)があるかどうかということです。地域や社会の中に困っている人がどれだけいるのか。その困っていることはどんなことなのか。

そのことを、自分たちの知識や技術、経験や情報、そして時間を使って、解決するための手段を創り出すことがSBでありCBだと私は考えます。



児玉 宏 こだま ひろし

■所属団体・役職 NPO法人 コーチズ(代表理事)

■団体概要 広島県最初のスポーツNPO法人として2000年10月設立。幼児から高齢者を対象にスポーツの普及活動や指導者の育成などを行っています。(経済産業省選定ソーシャルビジネス55選 受賞)

